

子どもたちが 大きくなったとき、 児童館での経験を 思い出してほしい

まえかわおさむ
前川修さん | 希望の家児童館 館長 |

昨年11月、南区の希望の家児童館にて、子どもたちと文化芸術との触れ合いをテーマに、希望の家児童館・山王児童館(いずれも南区山王学区)・崇仁児童館(下京区崇仁学区)の三館合同によるコンテンポラリーダンス※のワークショップ(体験型イベント)が開催された。3館の子どもたち約50人が、京都を中心に世界でも活動するMONOCHROME CIRCUS(モノクローム・サーカス)のダンサーの皆さんと一緒に、いろんな動物の動きを真似したり、不思議な動きを生み出すワークショップを体験した。会場となった希望の家児童館館長の前川修さんに、イベントの趣旨や児童館のこれからを語ってもらった。

※技法・表現形態に決まりがない自由なダンススタイル

| 楽しみながら心を育む。

イベント開催の背景について、前川さんはこう話す。「山王学区と崇仁学区のある京都駅東部・東南部エリアでは文化芸術と若者を基軸としたまちづくりが進められていて、実際に京都芸大生や若い芸術家による様々な取り組みが行われています。希望の家児童館がある地域福祉センター希望の家でも、京都芸大生の作品展示を何年も前から実施している中で、子どもたちにも文化芸術に触れる機会があればいいなという思いを持ち続けていました」。

子どもたちが参加できる体験型イベントとして、一昨年は「副産物楽団 ゾンビーズ※」の公演が行われ、今回はコンテンポラリーダンスのワークショップが開催された。「コンテンポラリーダンスは、まったく未知の分野で、子どもたちには難しいかもしれない最初は心配でした」と前川さん。しかし、ダンサーからワークショップで行うのは「動物になって走ったりするようなダンス」と聞かされ、「それなら子どもたちも理解できると思い安心しました。実際、みんなとても楽しそうでしたからね(笑)」。

また、ダンサーの子どもへの安全に配慮した接し方、参加した子どもたち全員に楽しんでもらいたいという姿勢に強く共感したという。「ワークショップを始める前、『危なくない範囲で楽しんでね』というメッセージが発せられ、子どもたちはそれを素直に受け入れていました。またなかなか輪に入れない子どもたちにも積極的に声をかけて参加を促していました」。もちろんイベントが盛り上がることは大切だが、前川さんには譲れないことがある。「私たちはプロとして子どもを育成してるので、楽しいだけではダメという意識を持っています。子どもたちの心を育むという意味で、今回のイベントは非常にいい企画だったと思います」。

※壊れたり使われなくなった楽器や美術製作過程の廃材等を活用した演奏集団



パジャマ姿のダンサーの皆さんと一緒にいろんな動物の動きを真似したり、不思議な動きを生み出す体験に、会場は子供たちの笑顔で包まれた。

| 地域で芸術家を育てる。

文化芸術との触れ合いは、子どもたちにどのような影響を与えるのだろうか。「今すぐ目に見える変化があるかどうか、それを見極めるのはとても難しいことです」と、前川さんは慎重に話す。その上でこんな願いを持っている。「子どもたちが中学生や高校生になったとき、あるいは大人になったときに児童館での経験を振り返り、それがきっかけで文化芸術の世界を目指す人が出てくればいいなと思っています。そういったことから子どもたちにはいい経験をたくさんさせてあげたいし、そうすることが私たちの仕事なんです」。希望の家児童館は長い歴史を持ち、折にふれさまざまな年代の卒業生が訪ねてくる。「彼ら彼女らが児童館で過ごせてよかったと言ってくれるとうれしいし、中には文化芸術方面に進んだ卒業生が何人かいて、音楽でヨーロッパに留学した子もいたんですよ」と前川さんは目を細める。

最後に児童館のこれからについて聞くと、こんな答えが返ってきた。「京都芸大の学生さんや美術工芸高校の生徒さんが自由に出入りできるような場所になったらいいですね。学校帰りに絵を描きに来たり、楽器の練習をしに来たり、そういったことが当たり前のようにできて、たまに今回のようなイベントがあったりする児童館です。そうなれば、子どもたちはもっと文化芸術に親しむことができると思うんです」。さらに続けて、理想とする未来像を語ってくれた。「児童館の中だけにとどまらず、例えば道端で演奏する学生さんや高瀬川沿いでスケッチをする生徒さんがいて、地域の人たちが投げ銭などのサポートをして次代の芸術家を育てていく。そうした循環が生まれることで、この地域が真の文化芸術のまちに近づいていけばいいなと思っています」。

March 2024

vol.
11



京都駅周辺エリアで生まれた
“地域×アーティスト”の活動。

|| 2ページ || 商店街×音楽

|| 3ページ || 商店街×アート

|| 4ページ || 児童館×ダンス

表紙写真: 嶋原商店街振興組合 代表理事 木村裕一さん

京都市立芸術大学音楽学部有志「まつもトリオ」左から松本宗大さん・萩原凜さん・木崎周さん(2ページ参照)

『5to9+』の
バックナンバー
はこちらから▶



【問い合わせ先】▶ 京都市総合企画局プロジェクト推進室 TEL.075-222-3176(土、日、祝を除く 午前8:45~午後5:30) FAX.075-213-0443
〒604-8571 京都市中京区寺町通御池上る上本能寺前町488番地 ☒project@city.kyoto.lg.jp

京都市印刷局 第056035号(令和6年3月)発行/京都市総合企画局プロジェクト推進室 *本誌記載内容の無断転載は御遠慮ください。



京都市
CITY OF KYOTO

商店街×音楽



商店街で開催された「島原へ酔ってカナイトピアストリート」(昨年9月16日)。



演奏会は商店街内のギャラリーで開催された(演奏:まつもトリオ)。



嶋原商店街だけではなく、梅小路公園周辺の5つの施設でも演奏会が開催されるなど、音楽を取り入れた賑わいが広がっている(「キャンドルナイト梅小路『伝燈祭(でんとうさい)』」2023|昨年10月14日)。

音楽を取り入れた賑わいづくりで梅小路公園界隈を元気にしたい



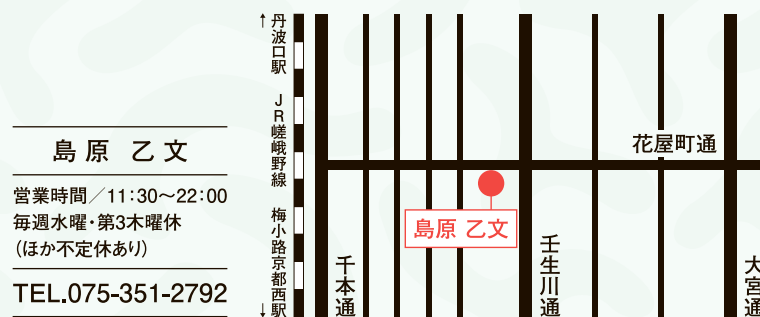
昨年から、梅小路公園周辺のホテルや商店街、飲食店等で京都芸大音楽学部生有志による演奏会が開かれている。梅小路公園にもほど近い嶋原商店街振興組合で代表理事を務める木村裕一さんに、演奏会への思いや今後の取組について伺った。

嶋原商店街振興組合
代表理事
木村裕一さん

人ばかりだね。お客さんも『近所のお兄ちゃんがやってはる』みたいな感じで話し掛け、とても和やかな演奏会になりました」と顔をほころばせる。演奏が終わると子どもたちが目を輝かせながら楽器の周りに集まり、“お兄ちゃん”の手ほどきを受けながら即席の楽器体験会を楽しんだ。

「まちづくりのヒントを期待。」

「これからも演奏会を続けるつもりですし、他にも商店街や地域の活性化につながる取組を学生さんと一緒に考えていきたい」と木村さん。さらにこんな期待も寄せる。「今回は演奏で協力してもらったが、様々な学びをしている学生の方々から、一人暮らしのお年寄りの買い物サポート方法や空き家対策など商店街が抱える問題解決に向けて、私たちでは思いもつかないような「まちづくりのヒント」をいただければありがたいです」。木村さんは嶋原商店街を含む、梅小路公園や七条通界隈の活性化にも目を向けている。「近くに京都市中央市場がある食のまちなので、周辺の商店街同士が手を組んで、スタンプラリーみたいに食べ物ラリーができひんかなと考えてるんです。いろんな商店街と一つになって梅小路公園の周りをもっと元気にしていきたいですね」。



「温故知新」の商店街。

木村さんは嶋原商店街に昭和2年から続く京料理店「島原 乙文」の3代目。近くにあった花街や西本願寺を訪れる人をもてなすために誕生したという嶋原商店街は、木村さんが子どものころは3軒の八百屋、2軒の魚屋のほか、あらゆる業種の店が軒を連ねかなり賑わっていたそうです。商店街には町家をリノベーションしたお洒落なコーヒー店もあり、そのお店を目当てに訪れる人も多い。「わが商店街の気質をひと言で表すと『温故知新』ですね。ずっと商売を続けている店と新しい店が互いに学び合い、今の時代にふさわしい商店街になるよう頑張ってます」。

「“近所のお兄ちゃん”が演奏。」

そこで新たに取り組まれたのが、京都芸大生との連携による音楽を取り入れた賑わいづくり。これまでも木村さんのお店でお料理と音楽を楽しむ企画を開催していたが、昨年9月に初めて商店街として演奏会を開催した。「商店街を盛り上げるため、夏はビール、冬は日本酒をテーマにしたイベントをやっているんですが、京都芸大が同じ下京区に移転したので学生さんに演奏の場を提供しようと考えたんです。音楽家の生演奏を聴く機会ってなかなかないですね。私も音楽好きですがコンサートはいろんな面でハードルが高いので、ご近所の方に音楽を身近に楽しんでもらえる場を用意したかったんです」。

『音楽のある商店街 in 島原』と銘打たれた演奏会では、キーボード、打楽器、サクソフォンのトリオがクラシックからジャズ、歌謡曲まで多様なジャンルの楽曲を披露した。「いろんな世代の人が来るとして、誰もが耳にしたことのある曲をお願いしたんです」と木村さん。その言葉通り会場のお店は満員御礼となり、大人も子どもも芸大生たちの演奏を満喫した。「学生さんは親しみやすい

商店街×アート

夢は京都の玄関口を文化芸術の香り漂うまちにすること

七条商店街振興組合
理事長
丹治潔さん



昨年秋から京都駅前の七条通の商店街では、その近くに移転した京都市立美術工芸高校と京都市立芸術大学の学生による取組が行われている。七条商店街振興組合の理事長を務め、同商店街に店舗を構える和ろうそくの老舗「丹治蓮生堂」の3代目である丹治潔さんに、取組の内容や商店街のこれからについて伺った。

「想像以上のレベル。」

美術工芸高校の授業の一環として始まった取組では、学生たちが商店街のそれぞれの店舗向けにパッケージや包装紙、ロゴなどのデザイン制作を進めており、丹治さんのお店でも協力している。「最初にうちの店に来た時、店の歴史を書いた本を渡しました。見た目の斬新さだけにこだわるのではなく、店のことをしっかり理解した上でデザインを考えてみたらどうやって言ったんです」と丹治さん。その出来栄は想像以上であったという。「和ろうそくの形を上手にアレンジしたり、ろうの原料であるハゼの実を取り入れたりと、ロゴの素案を10個ほどつくってくれてね。みんないいデザインばかりで正直高校生のレベルがこんなに高いとは思いませんでした。うちにはネコを目当てに来られるお客さんもいるという話をしたら、ネコの上にろうそくが乗っていて、思わずほっこりするようなロゴも提案してくれました。」と丹治さんは笑顔で語る。学生たちの力作はこの春に完成の予定という。

「将来の仕事につなげる。」

京都芸大の学生と連携した取組では、アンテナショップ「ノキサキ」を昨年11月にオープンさせた。こちらは学生が店舗の“軒先”を借りるというもので、その第一弾として商店街にある老舗の和菓子店「松屋製菓」で作品の展示・販売が行われている。「軒先貸して何とかって、よく言いますけどね(笑)。冗談はさておき、今回の取組をきっかけにいろんな店の軒先が活気づいたら面白いんじゃないかなと考えてます」。商店街のPRにもつながるアンテナショップだが、その試みにはこんな思いがあると丹治さんは言う。「学生さんには大きくなってほしい



美術工芸高校の学生が店舗と話し合いながら、それぞれの店舗向けにパッケージや包装紙、ロゴなどのデザイン制作を進めている(写真協力:豆富本舗)。



「松屋製菓」にあるアンテナショップ「ノキサキ」では、京都芸大生が作成したポストカードや漆のアクセサリなど、色々な作品を販売中。

ですからね。そのための踏み台として商店街を使ってくれたらいい、でもその代わり将来プロを目指す意識を忘れないでほしい」。この思いは美術工芸高校の学生に対しても同じ。「学校でひたすらスキルを上げるのも大事やけど、やっぱり将来のことを考えると、AIがデザインまでできるようになるかもしれない時代の中で、今回の取組を通じて、自分のやっていることをいかに仕事につなげるかについて考えるきっかけになったらうれしい。そのために来年も再来年もやりたいですね」。

「門前町の文化性を生かす。」

京都駅前の商店街の理事長として、近隣の商店街と連携してスタンプラリーやクーポンチケット発行など、周辺地域の活性化にも取り組み、歴史ある商店街に新たな風を吹き込む丹治さんの夢は、「文化芸術の香りがするまちづくり」だと教えてくれた。「他とは違う特色のある商店街にしたいという思いをずっと持っています。京都芸大と美術工芸高校が近くに来たこともありますし、この近所には東本願寺や西本願寺をはじめ寺社仏閣がたくさんあってこれから何百年も続くだろうから、時間がかかってもいいので門前町という文化性を生かし、京都の玄関口にふさわしい独自性のある商店街を目指したい」と丹治さんは商店街の未来に期待を寄せる。

松屋製菓(ノキサキ)
営業時間／8:00～17:30
水・木曜休
(商品が売切れ次第閉店)
TEL.075-371-5151

